

3-6-2 江戸街道の史跡

この旧江戸街道は尾根道が多く、随所で高山市街地の眺望が良い。健康づくりに、そして、歴史を感じながらハイキングをするには良いコースであろう。

江戸まで 43 次 85 里 (337 km)

山口が最初の宿場で、金森長近が道普請をして本道往還筋とした飛騨唯一の公道。

- ①了心寺 山号を松生山しょうぶさん、浄土真宗大谷派、開基永正 15 年 (1518)
- ②高札場 もともと現地より 100m 先の山手にあった。現在の公示、告示掲示板。
姉小路歌碑 おくふかく 華をたつぬる あけほのに 山口しるく 雲も かほれる
楠神社 明治 36 年頃、現高山病院地内で「嗚呼忠臣楠正成」と刻字された石碑を発見。
桜ヶ岡八幡神社の末社
- ③橋場 山口谷川にかかる重要な橋、長さ 8 間
- ④関屋跡 関所の門番所があった場所
- ⑤梅村用水 梅村速水は、大島から山口へ水を引こうとしたが、もう少しのところで完成をみなかった。1,000 分の 1 勾配
- ⑥のぞき城 のぞき新蔵という武士が在城したという。山頂に平地がある。
- ⑦蛇ぬけ 安永 2 年 (1773) の山崩れ。大原騒動の年でもある。
- ⑧雨乞平 昭和中頃まで行なわれた。昭和 43 年の畑かん施設により山口の水不足はようやく解消。
- ⑨幕の内 永禄 7 年 (1564) 武田が飛騨を攻めた際の陣跡といわれる。
- ⑩接待所跡 昭和の初めまで茶屋があった。
- ⑪南無阿弥陀仏の石 新八郎という若者がこれを刻んで自害したと伝わる。
- ⑫餅売場 八百比丘尼がこの辺りに茶屋を開いて餅を売ったという。
- ⑬比丘尼屋敷 伝説の八百比丘尼が住んでいたという。
- ⑭三角点 標高 984.9m
- ⑮峠の観音 水呑洞にある。
- ⑯神力不動 以前清涼な水が湧き出していた。高根にあった石仏不動尊をここに移して祀る。

菊田秋宜きくたあきよし建立 天保 3 年 (1832)

「献燈荏名神社大前

左江戸みのぶさん道せんこうじ

行列の見事乗鞍かさが岳

やりさへ高くふれるしら雪 秋宜

天保壬辰春 3 月 菊田秋宜」

<明治時代飛騨地図から>

明治 8 年、筑摩県時代には飛騨往還 (松本、野麦、高山) と飛州往還 (木曾福島西野、

日和田、高山)を3等とし、道幅を9尺以上としたが、改修をされたところはあまりなかった。依然として江戸時代のままが続いたが、明治28年日清戦争が済んでから野麦街道が整備され、美女峠もその頃によく改修されたのである。

別紙「江名子～久々野の道図」は明治時代初期の地図で、山口から辻へ太い線で表されているが、これは旧江戸街道であり、山口谷川沿いの道ではない。

山口谷川沿いの道は、明治30～40年代頃に新しくつけられ(図の⑤)、馬車が野麦まで通れるようになった。ここに人馬から荷馬車へと交通形態が変遷したのである。しかし、荷馬車がすべて山口谷川沿いの道へと移ったのでもなさそうで、昭和初期に旧江戸街道を荷馬車がカラカラと通っていったのを記憶している里人がいる。さらに、旧江戸街道の山路は荷馬車が通るつづらおりの坂道と、人が通る直線的な近道があったという。その通り、現在も旧江戸街道の遊歩道を1歩はずれて山へ入ると随所に別の旧道が何本も遺存している。

<伝説等>

①八百比丘尼の伝説

昔、この峠にたいそう美しい尼様が住んでいた。不思議なことにこの尼様は、何百年たっても少しも年をとらず、髪もつやつやと黒く、常に17、18歳としか見えなかった。それで八百比丘尼と呼ぶようになったという。

この尼様は美しいだけでなく、愛嬌が良くて餅を作ることが上手で、毎日道端の店で売っていた。この峠を通る旅人はその餅の味の良さと、尼様の愛嬌の良さに引かれて店で休み、旅の疲れを忘れたのである。後、訳があつてこの尼様は長い間住み慣れた峠の茶屋を捨て、若狭へ移って行った。その時、長い間世話になった村人たちに何かお礼の気持ちを残したいと思い、「私のか弱い力では何もできませんが、もし日照りが続いて難儀するような時には、この山に登って雨乞いをして下さい。きっと雨を降らせます。」と言い残してこの山から姿を消した。

村人はこの尼様のいた所を比丘尼屋敷といい、餅を売った所を餅売場と呼ぶ。また峠に「雨乞平」と呼ぶ所があつて、日照りの時には村人がここに集まり、1晩中焚火をし、鉦を打ち鳴らして雨乞いをする、八百比丘尼の言った通り雨が降るといわれる。